

回向院(日本一の無縁寺)

およそ360年前の明暦3年(1657年)に開かれた浄土宗の寺院。この年に、明暦の大火があり、10万人以上の尊い人命が奪われた。亡くなった人々の多くは身元や身寄りのわからない人々だったため、第4代徳川将軍家綱は無縁の人々の亡骸を手厚く葬り、無縁仏の冥福に祈りをささげる大法要を執り行った。このとき建てられた御堂が回向院の歴史の始まり。院内には、水子塚、力塚(勸進相撲)、鼠小僧次郎吉の墓、関東大震災供養塔、犬、猫、鳥等の慰霊碑、供養碑等がある。回向院の勸進相撲は1768年からはじまり、1833年から春夏2回の興行の定場所となり、1909年の旧両国国技館が完成するまで「回向院相撲の時代」が続いた。

旧両国橋・広小路跡

旧両国橋は現在の両国橋の下流約五十メートルの辺りに架かっていた。完成は万治2年(1659年)12月。明暦3年(1657年)の大火が大災害となったため、幕府が防災上の理由から架け、武蔵と下総の国を結ぶ橋なので、両国橋と呼ばれた。橋の上は、四方が眺望できる絶景の場所で、近くは浅草の観音堂、遠くは常陸の筑波山まで見えた。橋が架かったことで、交通の要衝となるとともに、橋の袂には火除け地としての広小路が設けられた。西側(日本橋側)は「両国広小路」といわれ、芝居小屋や寄席、腰掛茶屋が立ち並び、東側は「向こう両国」と呼ばれ、見世物小屋、食べ物屋の屋台が軒を連ねる繁華街となった。寛保2年(1742年)の調査では一日に2万人以上が往来したとされている。

一之橋(忠臣蔵)

江戸幕府は低湿地であった本所の開発に当たり、洪水の被害を最小限に食い止めるため、隅田川に対し、排水路を基盤目状に開削した。万治2年(1659年)、縦の排水路の代表格の堅川の開削と同時に架けられたのが一之橋で、隅田川から入って一つ目の橋という意で命名された。(長さ13間、幅2間半) 堅川の両岸には、全国から水運でもたらされる様々な物品を扱う商家や土蔵などが立ち並び、橋を歩きかう人々も多く、大いに賑わった。一之橋は、赤穂浪士が泉岳寺に引き揚げる際に最初に渡った橋としても知られている。

春日野部屋(出羽海一門)

師匠は十一代・春日野清隆(元関脇・栃乃和歌)。大正14年(1925年)5月、第二十七代横綱・栃木山(八代・春日野剛也)が、出羽海部屋から分離独立し、創設。昭和34年(1959年)10月、八代・春日野の死去に伴い、部屋所属の第四十四代横綱栃錦が現役のまま九代・春日野を襲名、部屋を継承し、昭和35年(1960年)、現役を引退するまでの間、二枚鑑札で部屋運営にあたった。また、九代・春日野は、昭和49年(1974年)から昭和63年(1988年)まで日本相撲協会理事長を務めた。平成2年(1990年)1月、九代・春日野の死去に伴い、部屋付の中立親方(第四九代横綱栃ノ海)が部屋を継承、十代・春日野晃将を襲名した。平成15年(2003年)2月、十代・春日野の定年退職に伴い、部屋付の竹縄親方(元関脇・栃乃和歌)が十一代春日野を襲名し、部屋を継承、今日に至っている。

江島杉山神社

針術(鍼術)の神様・杉山和一(1610年から1694年)が五代将軍綱吉から、ここ本所一つ目に約一万二千平方メートルの土地を拝領し、総録屋敷を建て、その西隣に弁財天の一社を建立したのが、江島杉山神社の始まりである。神奈川県藤沢市の江の島弁財天と杉山和一総検校が祀られている。和一は現在の三重県津市の出身で、幼いころに失明したが、江戸に出て針術を学び、江ノ島弁天の岩屋にこもり針術の一つである管針術を授かった。その後京都でも針術を学び、再び江戸に戻り、針の名人として活躍した。この評判を聞いた綱吉は、和一を「扶持検校」として召し抱え、日夜自分の治療に当たさせた。

—裏面に続く—

吉良邸裏門跡

赤穂浪士討ち入りの際、裏門からは大石主税以下24名が門を叩き壊して侵入、寝こみを襲われ半睡状態に近い吉良家の家臣を次々に切り伏せた。吉良家にも何人かの勇士がいたが、寝間着姿では鎖帷子を着込み完全武装の赤穂浪士には到底かなわなかった。広大な屋敷の中で一時間余り続いた討ち入りは、壮絶なもので、吉良家側の死傷者が38名だったのに対し、赤穂浪士側は2名が軽いけがを負っただけだった。

吉良邸跡

吉良上野介義央の屋敷は広大で、東西73間、南北35間で、面積は2千2百五十坪(約八千四百平方メートル)だったとされている。吉良上野介が隠居したのは元禄14年(1701年)3月の刃傷事件の数か月後、幕府は呉服橋門内にあった吉良家の屋敷を召し上げ、代わりにこの本所二つ目に屋敷を与えた。現在、吉良邸跡として残されている本

所松坂公園は当時の 86 分の 1 の大きさにすぎない。この公園内に吉良上野介坐像、邸内見取り図、土地寄贈者リストなどの他、吉良上野介を祀った稲荷神社が残されている。

勝海舟生誕の地(所在地:墨田区両国4丁目25番地)

勝海舟は、文政6年(1823年)正月3日、ここにあった男谷精一郎の屋敷で生まれた。父惟寅(小吉)は男谷忠恕(幕府勤定組頭)の三男で、文化5年(1808年)七歳のとき勝元良に養子入りし、文政2年に元良の娘のぶと結婚、男谷邸内に新居を構えた。海舟は七歳までの幼少期をこの地で過ごした。蘭学を修め、西洋の兵学、砲術、航海、測量法などを学び、安政7年(1860年)1月、咸臨丸艦長として邦人の手による初の太平洋横断の快挙をなしとげた。慶応4年(1868年)3月、高輪の薩摩藩邸において西郷隆盛と会見し、江戸城無血開城に成功し、江戸市民を戦禍から救った。明治政府にも重用され、参謀兼海軍卿・元老院議員などになり伯爵となった。

芥川龍之介文学碑

この文学碑には芥川龍之介の代表作の一つである「杜子春」の一節が刻まれている。この両国の地に生育し、両国小学校で学んだ。近代日本を代表する作家芥川龍之介の人生観を学び氏の文才を偲ぶものとして両国小学校創立百五十周年の記念事業として、平成2年10月に建立された。

杜子春の一節より:

「お前はもう仙人になりたいといふ望みも持ってゐまい。大金持ちになることは、元より愛想が尽きた筈だ。ではお前はこれから後、何になったら好いと思ふな。」「何になっても、人間らしい、正直な暮らしをするつもりです。」杜子春の聲には今までにない晴れ晴れした調子がこもってゐました。

芥川龍之介生育の地

芥川龍之介は、明治25年(1892年)、東京市京橋区入舟町に新原敬三、「ふく」の長男として生まれた。辰年辰の日の辰の刻に生まれたのにちなんで龍之介と命名された。生後7か月の時、母「ふく

が突然発病したために、本所区

小泉町15番地(現両国3丁目)に住んでいた「ふく」の長兄芥川通章に引き取られ、13歳の時芥川家の養子となった。

芥川家は旧幕臣で江戸時代からの名家で、通章は教養趣味が深く、文学、美術を好み、俳句や盆栽に親しむ等、江戸趣味豊かな家庭だった。本所は龍之介の幼時期から少青年期までの大事な時期を育んだ場所だった。「明治31年回向院に隣接する江東尋常小学校付属幼稚園に入園、翌年同小学校(現両国小学校)に入学、明治38年府立第3中学校(現両国高等学校)入学

、大正2年東京帝国大学(現東京大学)英文科入学、大正5年卒業。